

野坂昭如『火垂るの墓』における待遇表現

満永 さゆき

要旨 野坂昭如の『火垂るの墓』の方言を、特に待遇表現にしばって論じる。この小説の舞台である、第2次世界大戦前の神戸東部、石屋川周辺の新興住宅地では、大阪方言と神戸方言、さらに共通語が混ざり合った方言が使われていたとされるが、この小説はそれを正確に描写していると考えられる。大阪方言と神戸方言のもっとも顕著な違いは待遇表現に現れるので、これに関して4点考察を行った。

①「～ハル」「～テヤ」などの尊敬語は、大部分大阪的なハルであって、本来の神戸的なテヤは成人女性の発話に1例みられるだけである。昭和33年の鎌田良二の報告ではテヤが使われるとされる地域に入っているにもかかわらずハルが多く、大阪に近い形なのが注目される。ハル・テヤ以外の尊敬の助詞・助動詞は現れなかった。

②命令・依頼表現については、ナハレ（大阪・神戸とも、但し古い言い方）が一例成人男性（人力車の車夫）の発話に見られる以外特に注目すべき現象はない。命令形以外のナハルは現れない。

③アスペクト表現「～トル」「～ヨル」「～テル」については、大阪的なテルが、神戸的なトル・ヨルより多い。ヨルは100%卑語的使用（大阪的）。トルは約半数が卑語的使用（大阪的）、残り約半数が卑語的使用ではない（神戸的）。テルに卑語的使用はない（大阪・神戸とも）。トル・テルは進行・結果・過去の習慣の意味（大阪・神戸とも）だが、ヨルは完成相のみ（大阪的）である。大阪にかなり近いと言える。

④存在を示す本動詞の「イル」「オル」「イテル」については、オル（神戸的）・イテル（大阪的）の両方が現れ、ややオルが優勢である。イルは現れない。イテルには卑語の意味はない。オルも1例を除き卑語的ではない。これについては、どちらかというとなんて神戸的であるといえる。

以上、全体として大阪の特徴が優勢だが、④についてはやや神戸の特徴が優勢である。